

私は主役

大塚喜子

午前六時、私はベッドの脇で転倒した。素知らぬ顔で朝の食卓につくと、夫が「頭に大きな瘤が……」と笑った。撫でると痛かった。絆創膏では間に合わない。午前十時、ハンドルを握って、駅前の脳外科クリニックを受診した。医師はMRIの画像写真を見て「硬膜下血腫」と診断して、大学病院に搬送する手配をした。

救急車が到着する迄の間、夫にはゴミ出し、戸締り、火の用心、植木の水やり、食事のこと……思いつくまま、ありったけのサゼッションをした。呆然とするばかりで、全く頼りにならない夫に、車のカギを握らせ、その背中を押した。

午後一時……私は頭蓋骨に開けた穴から血を吸引する手術を受けた。痛みは皆無だが、不安でいっぱいであった。両手を恐る恐る意識すると、指はどれも密やかに、軽やかに動く。気がつけば鍵盤をなぞっている。鍵盤が奏でる「トルコ行進曲」【ティアララルン ティアララルン……】に私の不安は一掃された。手術室は劇場ホール。手術台は舞台。天井のドデカイ白熱灯はスポット・ライト。役者はイケメンの執刀医と看護師、勿論、主役は私。水色の愛想ない手術着は気に入らないが、仕方がない。

第一楽章の中程にきて、ここからクレシェンドでクライマックスに向かおうという時に、天井のライトの光源が落ちた。忽ちホールは不愛想な手術室に戻った。容赦なく主役の腕から管を抜く看護師は、有能かも知れないが、この上ない情ナシだ。

「終わりましたよ。血腫を吸引して中を洗いました。家族に報告します」という執刀医もヨクヨク見れば少しもイケメンでない。唯の強面だ。車椅子に降ろされた主役は二人の脇役に礼を言い、病室に移動した。

転んだだけなのに、今日一日のこの顛末は情けなかったが「トルコ行進曲」を多少なりとも未だに暗譜していたのに驚いた。小学校の時に習い始めて、高校生の時に練習が嫌で投げ出したままのピアノだったから。